

The Town の創作と構造をめぐる

田 中 久 男

The Town は *The Hamlet* (1940) から17年の歳月を隔てて、1957年5月1日にランダム・ハウス社から出版された。しかし、この作品の評価は一般によくなかった。Alfred Kazin は書評で、Faulkner の “astounding imagination” と “unflagging passionate mind” を認めつつも、“Tired, drummed-up, boring, often merely frivolous” と決めつけ、“Faulkner has less and less interest in writing what are called ‘novels’ at all” と手厳しい評価を下している¹⁾。Irving Howe も、この作品が成功しなかった原因を、“a flagging of creative energies” と “a propensity for avoiding the direct and dramatic”²⁾ であると指摘している。Cleanth Brooks も、この作品が “a rather frail and limber board” なもので、“In thus avoiding the central novel of the trilogy, one would lose nothing very essential...” とまで述べている³⁾。

このように批評家の評価は、概して消極的、否定的であった。作者自身も *The Town* を執筆中、“I still feel...that perhaps I have written myself out and all that remains now is the empty craftsmanship...”⁴⁾ と言って、創造力が枯渇したのではないかという気持ちになったり、“I still cant tell, it may be trash except for certain parts, though I think not.” (*Letters*, pp. 399-400) と言うほど、作品の出来ばえについて、自信のなさや迷いを見せている。そして1957年5月にヴァージニア大学において、*New York Times Book Review* の Kazin の見方、即ち、作者は「ヨクナパトーファ・サーガ」に疲れてしまったのだ、という評言に対する見解を求められたとき、*The Town* は “novel” ではなく “chronicle” であり、もし疲れたという印象を与えるとすれば、それは “tiredness” のせいではなく、構想を持って長く筆をおき過ぎたための

“staleness” のせいであったかも知れない、という主旨の答えをしている。⁵⁾ 更に、なぜ *The Town* の筆を長く執らなかつたのかと問われて、次のように答えている。

There were so many other things that got in the way of it. I would write a little on it and then I would think of something else that seemed more urgent, that did fit into the more or less rigid pattern which a novel has got to conform to and this was too loose to fit into that form to give the pleasure which doing a complete job within the rules of the craft demand. That it's more fun doing a single piece which has the unity and coherence, the proper emphasis and integration, which a long chronicle doesn't have. That was the reason.⁶⁾

ここで作者が述べている要点は、*The Town* の執筆にかかる前に多くの邪魔な物が入り込んできたこと、および、単一の「小説」(novel)の方が、統一、まとまりといった創作の法則に合わせて、ある型にはめ易く、書くのも楽しいが、*The Town* のような「年代記小説」(chronicle)だと、小説のような型にはまりにくいのだ、ということである。

本稿では、上で作者が述べていることを検証するために、*The Town* の筆を執るまでに彼が取り組んでいた仕事とそれに関する状況を簡潔に辿り、そのあとに、この作品を「年代記小説」だと考える作者の立場を尊重しながら、この作品の構造に見られるいくつかの問題点を考察してみたい。

1

1938年12月15日にランダム・ハウス社の Robert K. Haas が受け取った手紙で、Faulkner はスノー・ブス三部作の予定の内容を被溼している (*Letters*, pp. 107-108)⁷⁾。もちろんその内容は、現行の *The Town* と *The Mansion* のそれとはかなり違っているが、ともかくこの時点で、作者が三部作の構想を立てていたということは、注目してよい。作者はすでに、*The Town* に組み込まれるエピソードとなった二篇の短篇、“Centaur in Brass” (*American Mercury*,

XXV [February 1932]) と “Mule in the Yard” (Scribner’s, XCVI [August 1934]) を発表していた。その上 *Sartoris* (1929) において、Flem Snopes がジェファソンの横丁の小さなレストランを足掛りにして社会的上昇を図り、最後にはサートリス銀行の副頭取の地位に辿り着くことが、説明的に述べられていた。それ故、三部作の構想とその下準備をある程度整えていた作者が、*The Hamlet* に続いて *The Town* の筆を執ることは、容易にできたはずなのだ。ところが Blotner によると、作者がこの作品の執筆を開始したと手紙で告げているのは、1955年12月2日ということで、第一巻が上梓されてから15年もの歳月が流れてしまっている。この間、Haas から出された短篇集の出版計画に対して、1948年9月末頃に、先に触れた二篇の短篇を “further Snopes saga” (*Letters*, p. 274) に取り込む予定だと述べている以外、手紙類にはスノーブスの作品への言及が見当たらないことから考えて、*The Town* 執筆のことは、作者の意識から遠のいていたに違いない。この長い空白期間とその間の “many other things” が、その執筆に何らかの影響を与えたことは、十分考えられることである。このことを考察する前に、15年もの間作者が何をしていたのかを概観しておきたい。

Faulkner は *The Hamlet* を書き上げてから、慢性状態の金銭的苦境を切り抜けるために、短篇の執筆に向ったようである (*Letters*, pp. 121-122)¹⁰⁾。この同じ手紙の中で、“a blood-and-thunder mystery novel” (*Intruder in the Dust* となる作品) の執筆の予定を告げ、同時にこれとは別に、*The Unvanquished* (1938) と同じ手法で仕上げるつもりの作品も考えている、と述べている。後者、つまり *Go Down, Moses* は、これに取り込まれる6篇の短篇¹¹⁾をまず雑誌社に売ってから、1942年5月に出版された。

1939年9月に第一次大戦が勃発し、1941年12月には太平洋戦争が開始された。作者は1940年5月頃の手紙で、“What a hell of time we are facing” (*Letters*, p. 125) と述べているが、以後 “this destructive-bent world” (*Letters*, p. 137) の状況に精神を揺さぶられたようである。かつて英国空軍に加わった

経験から、この度の大戦においても、何らかの形で軍隊に、できれば空軍に所属して役に立ちたいとまで望んだ (*Letters*, pp. 150, 152)。だがこの希望には、自己の金銭的逼迫を軍人給与によって救いたいという気持ちも混っていた (*Letters*, pp. 153-154)。というのは、1932年8月に父親が死亡して以降、彼はフォークナー家の長子として、一族の者から金銭的にも、精神的にも、陰に陽に頼りとされ、その重荷 (load) を背負っていた (*Letters*, p. 153)。この圧迫が彼に、“I must get away from here [Oxford] and freshen my mental condition” (*Letters*, p. 155) と思わせることになったようである。この解決策を彼はハリウッドに求めた。

こうして1942年7月末から1945年9月にかけて、何度か帰郷することはあっても、ハリウッドで映画の台本書きの仕事をした。この滞在中、1935年に恋愛関係になっていた撮影記録係の Meta Carpenter との恋が再燃している。しかし、“I think I am no good at movies” (*Letters*, p. 172) と言うように、ハリウッドの仕事は彼の肌に合わなかった。が、一つ収穫があった。それは、その仕事仲間からもらったアイデアを基に、1944年早くに “a fable” (*Letters*, p. 178) を書き上げたことである。これは “Christ (some movement in mankind which wished to stop war forever) reappeared and was crucified again.” (*Letters*, p. 180) を主題とした50—60ページの作品で、作者はこれを一冊の本に整えることを考えたようである (*Biography*, p. 1154)。しかし、この考えは、7年契約という拘束によってハリウッドの仕事に関することを余儀なくされたため、中断せざるを得なかった。ところが1946年3月に、この作品の完成に故郷で専念してもよい旨の許可を得たので (*Biography*, p. 1211)、その完成を目指し、1947年7月頃には400ページまで書き進んでいた (*Letters*, p. 252)。この作品の執筆中に、“a complete novelette” (*Letters*, p. 253) として、のちに *Notes on a Horse Thief* (1951) となる作品も生み出した。1946年4月には、Malcolm Cowley が編集した *The Portable Faulkner* が出版されたが、これに *Faulkner* は “Appendix: The Compsons” を付した。

1948年1月には *A Fable* の執筆を中断して、“120 page short novel” とし

て予定した “a mystery murder” (*Letters*, p. 262) を書き始めていたが、結局は分量が二倍以上にも張らんで、同年9月に *Intruder in the Dust* として出版された。これに先がけて、この作品の映画権が MGM (Metro-Goldwyn-Mayer) に5万ドルで売れた。が、これによっても彼の金銭的苦境はよくなり、9月の Haas 宛の手紙で、月々500ドルを継続して送ってくれるように要請している。同じ月に Haas から持ち出された短篇集の計画に、作者は喜んで同意し、自ら分類をして、総数42篇の作品を収録した *Collected Stories of William Faulkner* を1950年8月に出した。この間もちろん、*A Fable* の執筆は進められていた。短篇集の出版を考えていた頃、同時に、“a Gavin Stevens’ volume, more or less detective stories” (*Letters*, p. 280) をまとめることも考えていた。この作品は、既発表の5篇の短篇と、1942年に書いていた “Knight’s Gambit” を “novella” (*Letters*, p. 285) になるまで加筆して、*Knight’s Gambit* として1949年11月に出版された。この年の8月には、作家志望の若いメンフィス出身の女性 Joan Williams と知り合い、以後しきりに書簡を交わし、会うこともしている。1933年12月に手をつけていた短篇 “Requiem for a Nun” (*Letters*, p. 298) を、彼女との合作として劇に実らせようと努力した。が結局、作者が単独で “a story in seven play-scenes, inside a novel” (*Letters*, p. 305) という実験的形態を使って、短篇と同じタイトルで1951年9月に出版した。この作品を脱稿して、作者は再び *A Fable* の執筆に専念する予定であったが、それが難しい状況がすでにあった。

1950年12月にノーベル賞受賞式に出席のため、ストックホルムに出かけたが、翌年は故郷を離れることが多くなった。2月にはハリウッドの台本書きの仕事に出かけ、4月には *A Fable* の背景となる土地を見るためもあって、フランスとイギリスに旅行した。7月にはニュー・ヨークで、*Requiem for a Nun* を舞台にのせる仕事をやり、9月に娘 Jill の入学のため、マサチューセッツに行ったあと、10月と11月にも、この作品を劇用に書き直すため、ボストンに出かけた。1952年も同じく、ニュー・ヨークやプリンストンを始め、西欧へ出かけているが、*A Fable* の執筆は続けていた。ところがこの年の3月に、

彼の乗用馬から落ちて脊椎骨を折り、メンフィスの病院で治療を受けるという不慮の事故に会った。この背中の痛みを和らげようと深酒することにもなったが、そのためにフランス滞在中に入院する羽目になった。この1952年秋には病気がちで入院を繰り返し、深酒癖が更にひどくなった。

しかし翌年早々には、持ち前の“will power” (*Letters*, p. 344) で *A Fable* を書き進めた。が、“The initial momentum ran out...” (*Letters*, p. 345) と Saxe Commins 宛の手紙で述べているように、筆の進みは鈍っていたようである。環境を変えて創作に打ち込もうという気持もあって、1月末からニュー・ヨークに滞在したが、すぐに病気が再発し入院してしまった。10月末までは当地と故郷を往復しながら *A Fable* に取り組み、その間に“Sherwood Anderson: An Appreciation” (*Atlantic Monthly*, CXCI [June 1953]) を書いた。11月末には Howard Hawks の映画の仕事の手伝いにヨーロッパに出かけ、翌1954年4月下旬に帰郷したが、この旅行中に Jean Stein と知り合った。執筆にほぼ10年かかった *A Fable* が、ようやく8月に出版された。この月には国際作家会議に出席のため、サン・パウロに飛んだし、娘 Jill の結婚があった。9月から翌1955年2月にかけては、故郷とニュー・ヨークを何度か往復し、3月と4月には、オレゴン、モンタナの両州立大学に講演に出かけた。7月末から10月にかけては、国務省の要請で、日本を含めてアジア、ヨーロッパに旅行した。この年から彼は、半ば要請から、半ば自ら進んで、いわゆる公けの仕事に関ることが多くなったが、これとは別に、外の世界に向けて口を開くことを余儀なくされる問題が発生した。これが人種の統合 (integration) の問題である。

この問題が南部を中心に激しく火を吹き出すようになったのは、1955年5月に最高裁が、公立学校における人種差別の撤廃を、「慎重な速度で」(with all deliberate speed)実施するようとの命令を出し、12月に Martin Luther King, Jr. を指導者として、アラバマ州のモントゴメリーで、黒人のバス・ボイコット闘争が展開(1年間)されてからである。¹³⁾ ミシシッピ州においては、1954年7月に人種差別主義者たちの「白人市民会議」(White Citizen's Council) が設立さ

れている。1955年6月頃から以後の作者の手紙には、人種問題に荒れ狂う情勢への憂慮、黒人にも白人にも自分の考えが理解してもらえないことへの苛立ち、苦渋に満ちた気持がよく窺える。公けにも彼は、自己の立場を表明せざるを得ない気持に駆られ、また実際にそうすることを余儀なくもされて、雑誌にも投稿している。¹⁴⁾

以上、*The Town* の執筆にかかるまでに作者が関わっていた仕事と状況を概観してみた。これらを考えてみると、作者自ら“the last major, ambitious work” (*Letters*, p. 348) と呼ぶ *A Fable* の創作にはほぼ10年かかったことが、恐らく彼を *The Town* の執筆から遠ざけていた最も大きな要因であったと言えるだろう。そしてこの *A Fable* のほかに、いろいろ“many other things”に関っていたため、*The Town* を書き始める時間も機会も見つけるのは難しかっただろうということは、十分察せられる。

確かに *Intruder in the Dust* とか *Requiem for a Nun* の代わりに、この *The Town* を書くこともできたのではないか、と考えられなくもない。更には、これらの作品は、*The Town* の語り手となる Charles Mallison と Gavin Stevens の人物像の輪郭を、予め読者に伝えておこうとする作者の意図から、*The Town* に先駆けて生み出されたという可能性は、必ずしも全面的に否定できないかも知れない。しかし、このような考えは、いわば、あと知恵の読み込みのようなものである。というのは、これらの作品を書く時点で、Mallison と Stevens を将来 *The Town* に使うことを考えて登場させたというよりは、すでに登場した彼らを、再度 *The Town* において使おうとしたと考える方が、恐らく適切であるからである。*Intruder in the Dust* とか *Requiem for a Nun* は、ちょうど *Absalom, Absalom!* (1936) 執筆中に *Pylon* (1935) が生み出されたように、*A Fable* 執筆中に作者が一種の気分転換を図った、その産物という色彩が強いように思われる。¹⁵⁾ 見方を変えれば、これらの作品は、本稿の初めに引用した作者の言葉から考えて、「年代記小説」である *The Town* とは違い単一の作品として、作者には取り組み易く、執筆も楽しかったと想像

できるが、このことも、これらの作品が *A Fable* 執筆中に書かれ得た一因であったと考えられる。更に言えば、作者はハリウッドの仕事から離れて *A Fable* の執筆に取り組めるように、ランダム・ハウス社から月々お金を送ってもらっていたので、この大作の完成が遅れてしまう以上、何らかの作品を早く仕上げ、出版社の好意に少しでも報いておきたいという気持が働いた、その産物がこれらの作品であると考えすることは、必ずしもははずれではないように思われる。¹⁶⁾ あるいは作者は、*The Town* と *The Mansion* の間隔をあげずに続けて執筆したいと思っていたが、¹⁷⁾ これに要するまとまった時間と機会を見つけ出せずに、15年もの歳月が流れてしまったのかも知れない。

2

それにしても、15年の歳月は余りに長過ぎた。*The Town* の執筆に取りかかる時点で、スノープスの物語が作者にとって陳腐なものであったのは、恐らく疑い得ないことである。*Sartoris* (あるいは“Father Abraham”)においてスノープス一族を作り出してから、ほぼ30年間という長い期間にわたって、作者はスノープスの題材に陰に陽に付き合っていたのである。一方、この作品の執筆中の1956年3月18日に、人種問題等に対する苛立ち、焦り、怒りとか、かつて痛めた背中への痛み、身体の衰え、深酒などが積もり積った結果、吐血して意識不明に陥った。このように肉体的にも精神的にも良い状態になかったし、しかも古い題材に改めて取り組むということで、*The Town* の執筆は気分浄化にはならず、楽しくもなく、熱を帯びることもなかったであろうことは十分考えられる。事実、“Now I don't even want to work on my work” (*Letters*, p. 399) という言葉すら漏らしている。こうしたことが、この作品を“a lesser work than *The Hamlet*”¹⁸⁾ にしてしまった外的要因、つまり作品外から生じた要因であったと思われる。

The Town が *The Hamlet* より劣る作品になった内的要因、つまり作品自体から出てくる要因として、恐らく最も顕著なものは、Mallison と Stevens と V. K. Ratliff の三人が語り手として一章ずつを担当して総計24章をなすと

いう構造が、必ずしも適切に機能していないという点だろう。この複数の語り手（あるいは視点）という技巧は、例えば、*The Sound and the Fury* (1929), *As I Lay Dying* (1930), *Absalom, Absalom!* (1936) において試みられているし、また成功している。一般にこの技巧の意義は、複数の語り手が伝えてくれる内容が、交錯し合い、時に矛盾し合いながら、多角的にその内容に対する読者の理解を深め豊かなものにし、真実を総体的なヴィジョンにおいて捉えるように促す、ということにあると思う。別の言い方をすれば、複数の情報が投げかける光が、重層的に照射し合いながら、単独の情報では隠れてしまいかねない実体を照らし出すという働きをするのである。もちろん個々の作品によって、複数の語り手の使用も、自ずとその意義と質において違いはあるが、*The Town* は少なくとも構造的には、上に挙げた作品の系譜に属するものである。

The Town において三人の語り手を使った意図を、作者は次のように説明している。

...it was used deliberately to look at the object from three points of view.... Also, it was to look at it from three different mentalities. That was—one was the mirror which obliterated all except truth, because the mirror didn't know the other factors existed. Another was to look at it from the point of view of someone who had made of himself a more or less artificial man through his desire to practice what he had been told was a good virtue, apart from his belief in virtues.... The other was from the point of view of a man who practiced virtue from simple instinct...for a practical reason, because it was better.

19)

ここで作者は、真実の情報のみを伝える、言わば“mirror”に徹している少年 Mallison と、環境によって教え込まれた美德とか価値観を、半ば観念的に自己の行動の基盤にしている Stevens と、人間の本然的な感情に基づいて、現実を見定めながら行動する Ratliff という、この作品における三者三様の役割を

うまく説明している。引用文の中で作者が言っている対象 (object) とは、言うまでもなく Flem を中心としたスノープシズム (Snopesism) のことである。とすれば、それを三様の特質を持った語り手たちがどのように見ているのか、そしてそれに関して、各語り手がどのような情報を提供してくれるのか、言い換えれば、彼らがスノープシズムの実体を、どのように浮かび上がらせてくれるのかということ、構造的には読者に期待させるはずである。語り手の質としても、“mirror” の役割に徹する Mallison と、理想主義者 Stevens と、現実感覚を基盤としている Ratliff は、幾分単純化してみれば、*The Sound and the Fury* の Benjy と Quentin と Jason のそれぞれに、またその変形としては、*Absalom, Absalom!* の Miss Rosa と Quentin (=Shreve) と Mr. Compson に当てはまる。これらの語り手たちが浮かび上がらせてくれたのは、Caddy とコンブソン家の悲劇であり、Sutpen と彼に関りのある人々の悲劇であった。だから、*The Hamlet* の続篇としての *The Town* においても、三人の語り手が、Flem を中心とした妻まじいスノープシズムの実体を、どのように物語として構築していくのかということに、読者の期待が寄せられるはずである。が、結果的には、その期待が半ばはぐらかされてしまった。この原因は先に触れたように、作品の構造が、スノープシズムを対象としてうまく機能しなかった点に求められるだろう。このことを見ていく前に、まず作品の形態のことを考えておかねばならない。

すでに言及したように、Faulkner は *The Town* を、“novel” ではなく “chronicle” だと呼んだ。彼は “chronicle” のような小説形態について、“it can't follow the fairly rigid rules which—in which a novel has got to be compressed to be a novel” だと漠然と定義してくれた。が Edwin Muir によると、“chronicle” の特色は、そのプロットが “a loose concatenation of episodes bound within a rigid external progression, which is time as it is reckoned by the human mind” だとのことである。この説明の少し前の一節で、“Instead of narrowing to a point, the point fixed by passion, or fear, or fate in the dramatic novel, it [time in the chronicle] stretches away

indefinitely, running with a scarcely perceptible check over all the barriers which might have marked its end” だとも述べている。つまり “chronicle” とは、時間の進行という厳しい枠組²²⁾の中で、エピソードがゆるやかな繋がりをなして、プロットが、ある劇的な一点に集中して進展しない類の形態というふうに理解していいだろう。

確かにこれらの要素は *The Town* に見られる。“Centaur in Brass” (第1章で使用)、“Mule in the Yard” (第16章で使用)、“The Waif” (第24章で使用)²³⁾の各エピソードのみならず、コティヨンの舞踏会での Stevens と De Spain との乱闘 (第3章)、Stevens の事務所に夜 Eula が訪れた際、彼女との肉体関係を彼が恐れ拒絶する出来事 (第5章)、Montgomery のポルノ写真の件を、Flem が密造酒製造の罪にすりかえる事件 (第10章) 等々、長短さまざまなエピソードがこの作品には含まれている。そしてそれらがゆるやかに連続しながら、最終章で Byron Snopes の動物のような子供たちを、Flem がエル・パソの彼に送り返すエピソードまで繋がっている。更にこれらのエピソードは、1909—1929年という外的な時間の枠に収まっている。が、この期間は言わば便宜的なものであって、この作品の物語の結末は、いわゆる “open-ended”²⁴⁾となっていて、次作の *The Mansion* において、Flem の物語が更に展開していくことを強く暗示する形になっている。そのために最後のエピソードは大団円とはならず、他のエピソード同様、Flem の社会的上昇の過程で起こりうる一つのエピソードに過ぎないような性格のものになっている。

なるほどこれらの特徴は、Muir が見ている “chronicle” という小説形態が持っている類の特徴である。しかし、*The Town* が “chronicle” だからと言って、エピソードがおしなべて、劇的な瞬間、場面を作り出す必要がないというわけではないだろう。例えば、Eula の自殺は、物語の進行の中で劇的な瞬間、あるいは場面となっていはずだし、Flem が銀行の頭取に就任することが、物語の中核になってもよかったはずである。もちろん物語の進行が、これらの出来事に向って集中していくべきだと言うのではないが、少なくともこれらは、フレムの社会的上昇の物語の中の大きな節目として扱われてもよかった

のである。にもかかわらず、それらは単に一つの節目、Mallison の言葉を借りれば、“a footprint”²⁵⁾ に過ぎないような印象を読者に与える。それ故、全体として物語の進行が平板 (flat) な感じになってしまうのである。この平板な感じが出てくる原因は、エピソードの扱われ方にもあるが、その根幹は作品の構造にあるのである。

The Town を構成する24章のうち、Mallison が10章、Stevens が8章、Ratliff が6章を担当しているが、語っている分量は Millgate の計算によると、Mallison が54パーセント、Stevens が38パーセント、Ratliff が8パーセントとなっている。Mallison は、周囲の人間から聞かされたり、自分が観察した出来事とかエピソード²⁶⁾を、それらの背後にある動因を考慮せずに伝える役割、つまり作者が言う“mirror”の働きを担った人物であるから、彼が語り手として受け持つ分量が多くても問題ではない。彼は Flem が町に住み始めた時点では生まれていないが、情報は“Cousin Gowan plus Uncle Gavin” (p. 3) という形で彼に伝わっているし、Flem とその一族に関する情報源としては、Stevens の友人である Ratliff という恰好の人物がいるのである。Mallison は、“So when I say ‘we’ and ‘we thought’ what I mean is Jefferson and what Jefferson thought” (p. 3) と言うように、町の人々の集合的意識の言わば濾過器のような役割をしている。もっともこの濾過器も、例えば第19章において、Eula と De Spain の18年にわたる不義密通の事実を、町の人々がどのような態度で対処すべきか迫まられていることの説明として、“And now, after eighteen years, the saw of retribution, which we of course called that of righteousness and simple justice, was about to touch that secret hidden unhealed nail buried in the moral tree of our community...” (p. 307) と述べるように、まるで作者の口吻が感じられるようなものになることも、時として起こっている。つまり、12才 (p. 304) の少年の語りには、いささか調子がずれているような箇所も見かけられる。が、彼の“mirror”としての役割は全体的には崩れていない。

Ratliff の話りの分量が少ないという事実は、*The Hamlet* における彼の語

りの才、縦横の機智の働きを知っている者には、意外な感じがしなくもない。Pat Stamper と Ab Snopes の博労としての腕の競い合いを村人に生き生きと語ってみせた Ratliff であれば、この *The Town* においても、作者はもう少し多く彼に語りの量を分担させてもよかったのではないかという疑問は、当然起こりうるはずである。しかし、作者の全知的視点から Ratliff の語りの才を生かした *The Hamlet* とは違って、この作品では複数の語り（視点）が用いられたために、彼の語りの質も変化し、彼の役割も自ずと変化、縮小されなければならなかっただろう。つまり、物語の舞台がフレンチマンズ・ベンドからジェファソンに移ったことで、*The Hamlet* において Ratliff が担っていた、スノーブズムの批判者、対抗者という役割を、*The Town* においては Stevens に移すことを作者は考えたはずなのである。言い換えれば、舞台が村から町に移ったことによって、ミンシンの行商人である Ratliff の出番が、せばめられなくてはならなかったということである。確かに彼は、非スノーブズ的な Wallstreet Panic Snopes の食料品店が財政危機に陥ったとき、金の工面をしてやり、Flem が Wall に金を貸しつけてその店の権利を奪おうとした企みを挫くことに成功してはいる。しかし彼が Flem に対抗できる舞台はその程度で、Flem が発電所の管理人から銀行の頭取になる各場面において、彼が手を出せる可能性は、たとえあったにしても、ごくわずかであろう。逆に言えば、Flem の存在が、社会的に彼から徐々に遠くなって行ったということである。村においてのように気軽に Flem の情報が手に入れられる場所が限られてしまい、それだけ彼に関する情報が間接的にならざるを得なくなるのである。この作品において彼がいささか生彩に欠け、村においての Flem たちに関する情報の提供者、Stevens たちの話し相手、忠言者、修正・補足する解説者、あるいは観察者といった役割におさまってしまったのは、作者の創造力の弛みのせいだけでなく、ある意味では、この作品の性質が必然的にもたらした結果である。

Ratliff のかつての役割を引き継ぐのが、町において少なくとも社会的に Flem に近づきうる Stevens である。彼は弁護士で、ハーヴァードで MA を、

ハイデルベルグで Ph. D. を取得した、いわゆる知識人である。この教養人 Stevens にかつての Ratliff の役割を担わせる際、作者は、同じく弁護士で教養人 Horace Benbow (*Sanctuary* [1931]) のことを念頭に置いていたかも知れない。即ち、社会の偏見、妹を含めた町の人々の精神の偏狭、歪みの壁の前に、正義を求める Benbow が空しく敗退し、それを通して、社会の悪の実相を浮かび上がらせたように、Stevens がスノーブイズムという悪に立ち向かい、それから敗れ去るという物語の展開を通して、社会の病巣となる凄まじいスノーブイズムの実体を映し出そうと考えたのかも知れない。そして、ちょうど *The Sound and the Fury* の Caddy と娘 Quentin の悲劇を通して、Jason の非人間性を映し出せたように、“two women character I am proud of” (*Letters*, p. 400) と作者が言う Eula と Linda の母娘の悲劇に Stevens を絡ませることによって、夫であり父親である Flem の非人間的な冷酷ぶりを、浮かび上がらせようとも作者は考えたのではなからうか。この作者の意図はある程度成功しているが、Stevens の語りの性質上、十分実現しているとは言い難い。

Stevens にはまず先に主義、原則があって、それに自己の考えと行動を合わせて行こうとする、理想主義者、ロマンティストの性癖が強い。その主義、原則が現実の場に合うかどうか、考慮してみようという姿勢が欠落しているのである。例えば彼は、Eula が人間的、世間的交わりの中で汚されていくことから守らねばならない、神聖に至純な女性であるかのように接しようとする。舞踏会での彼の行為はそれを証明するもので、“What he was doing was simply defending forever with his blood the principle that chastity and virtue in women shall be defended whether they exist or not” (p. 76) なのである。のちに Mallison が Ratliff に、“So he wouldn't hear you because he wouldn't believe it because it is something he don't want to be true.” (p. 258) と言っているように、Stevens は予断によって行動してしまうのである。この姿勢は Linda に対しても同じである。彼は “She's got to get away from here [Jefferson]. Away for good from all the very air that ever

heard or felt breathed the name of Snopes—” (p. 219) と考えて、彼女にニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジに行くことを勧める。その場所が “any young people of any age go to seek dreams” (p. 350) という単純な考え方から、彼女をスノーブシズムの及ぶ範囲外に出そうとするのである。もちろん彼は、善意と同情心から彼女の幸福を願って “forming her mind” (p. 194) しているのだが、彼女の希望とか事情とかを、必ずしも十分考慮しているわけではない。まして、冷徹で狡智を働かす Flem の実像を深く認識してはおらず、起こりうる可能性を予め考える努力も十分にしているわけではない。だから本来なら Linda に渡るはずの Will Varner の遺産が、結局は Flem に取られてしまう結果になってしまうのである。

Stevens は Ratliff から、スノーブス一族が “an influx of snakes or verminths from the woods” (p. 112) みたいに、町にはびこりかねないことを聞かされ、その “the danger and the threat” (p. 112) を認めていた。しかし、それはあくまでも観念的にあって、現実にはスノーブシズムに対抗する手段を考えているわけではないのである。“To save Jefferson from Snopeses is a crisis, an emergency, a duty. To save a Snopes from Snopeses is a privilege, an honor, a pride.” (p. 182) というふうに、抽象的な概念が先走ってしまい、それだけ現実を見定めて行動するという姿勢が希薄になってしまっている。その結果、スノーブシズムに対する彼の関心は、“a game, a contest or even a battle, a war” (p. 106) みたいに、儀式がかった勇み込んだものになり、彼の主たる関心が Eula と Linda をスノーブシズムから守ることに大きく移行してしまったような形になった。だから必然的に、この二人の女性と Stevens との関係の方が、彼の語りの前面に強く出てしまうことになる。逆に言えば、それだけこの作品が対象とするはずだったスノーブシズムという主題の影が薄くなってしまうのである。この主題の後退のため、この作品の対象が、“Gavin’s education in the nature of women and reality”²⁷⁾ だと見えてしまうことになった。

本来浮かび上がってくるはずだったスノーブズムの主題が、後退して影が薄くなってしまったということは、複数の語り（視点）の役割が本来の方向に十分機能しなかったということだが、この機能不足は、上に見たこととも関連のある、作品の構造と語りの質の問題によっても引き起こされているのである。構造の問題は、総数24章という構成によって、物語が断片化してしまいう傾向が生ずるということである。単純に数の点からだけ見ても、三部作のうちで *The Hamlet* は、“Flem”、“Eula”、“The Long Summer”、“The Peasants”の4篇、*The Mansion* は、“Mink”と“Linda”と“Flem”の3篇から構成されているのに対して、*The Town* は24章という細切れの構成になっている。細切れの構成ということでは、*As I Lay Dying* がすでに前例としてある。しかしこの作品は、バンドレン家の7人を含めた15人の人物による59篇の内的独白により構成されてはいるが、Addie Bundren の死と、彼女の遺言を果そうとする埋葬旅行という中心軸があるために、物語の断片化が食い止められ、統一は保たれている。ところが *The Town* は、エピソードのゆるやかな繋がりとという“chronicle”の性質上、それだけでも物語の断片化が起りうる危険があったのに、更に三人の語りによる24章の構成という形式が用いられた。その上、複数の語りが本来焦点とすべき Flem とその一族のスノーブズムの問題が、Stevens の一種道化じみた言動が大きく浮き出たために、焦点からずれてしまった。それ故、個々のエピソードが引き寄せられていくべき中心軸が弱くなり、物語の断片化の傾向が増長されてしまうのである。

この中心軸が弱くなった原因は、同時にまた、語りが時に説明的、分析的になる傾向にも求められるかも知れない。その傾向は、例えば、Flem が Montgomery と I. O. Snopes を体よく町から追い出した動機として、彼が「体面」(respectability) を必要としたためだ、と彼の内面を Ratliff が解き明かして説明するところ (pp. 258-259) に表われている。あるいは、Flem がサートリス銀行から自分の金を出してジェファソン銀行に入れたこと、彼が Will Varner を説き伏せて、De Spain が頭取になり、Flem が副頭取になったこと、彼が Wallstreet の店を欲しがったこと等々、これらの出来事の背景にあった Flem

の動機の分析、説明を Stevens がやり (第17章)、その修正、補足を Ratliff が次章でやるところにも顕著に窺われる。このように Flem の内面の説明、分析がなされるために、Vickery が言うように、“the inscrutable Flem of Frenchman’s Bend into the hypocritical Flem of *The Town*” と変化した印象²⁸⁾を読者に与えてしまうことになるのである。もちろん Flem は *The Town* においても前篇と同じように、抜け目がなく貪欲で、妻子すらも自己の社会的上昇のためには、その道具として使う冷徹性と狡智ぶりをそなえているし、作者自身の Flem に対する感情の変化、揺らぎもない²⁹⁾。にもかかわらず、この作品では Flem の内面が分析され、照らし出されてしまったために、*The Hamlet* において、彼の内面が不透明であるが故に出ていた不吉さ、ある謎めいた不気味さが、*The Town* においては著しく消え失せている。この Flem 像の変化、透明化が、物語の中心軸となるはずだったスノーブシズムの希薄化を招く一因になったとも考えられるのである。

Faulkner は *The Town* を脱稿すると、すぐに *The Mansion* の執筆に取りかかった。彼にとって、スノーブスたちは、相変わらず “alive and have been in motion”³⁰⁾ であって、彼らの物語の結末を、作家としての執念でもって見届け、片を付けようとするのである。60才の彼に残っているのは “the empty craftsmanship” などではなく、彼の創作力は Mink Snopes の登場によって、再び生彩を放つのである。

〔注〕

- 1) Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography*, 2 vols. (New York: Random House, 1974), p. 1663. 以下、本稿におけるこの伝記からの引用は、全て *Biography* と記し、そのあとにページ数を示す。特に注をつけていない場合でも、Faulkner に関する伝記的事項は、全てこの浩翰な書に負うている。
- 2) Irving Howe, *William Faulkner: A Critical Study*, 3rd ed., revised and expanded (Chicago and London: Univ. of Chicago Press, 1975), p. 286.

- 3) Cleanth Brooks, *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1963), p. 216. Howe とか Brooks とは違って、*The Town* をスノーブス三部作という大きな連続体の中で捉えて、好意的に解釈しようとしている批評家もいる。その代表的な研究書としては、Warren Beck, *Man in Motion: Faulkner's Trilogy* (Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1963) とか、James Gray Watson, *The Snopes Dilemma: Faulkner's Trilogy* (Coral Gables, Florida: Univ. of Miami Press, 1968) がある。*The Achievement of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1963) の著書 Michael Millgate は、この作品を “perhaps the most domestic of Faulkner's novels” (p. 235) であり、Gavin Stevens を “the central character” (p. 237) だと見ているが、“But *The Town* nevertheless builds upon *The Hamlet*...” (p. 237) と述べて、この作品が *The Hamlet* の続篇であることを十分考慮している。
- 4) Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), p. 391. 以下、本稿におけるこの書簡選集からの引用は、全て *Letters* と記し、そのあとにページ数を示す。
- 5) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958* (New York: Vintage Books, 1959), p. 107. 質問者は “Yoknapatawpha County chronicle” という言葉を使っているが、Kazin の用語は “the Yoknapatawpha saga” である (cf. Watson, p. 76)。
- 6) *Ibid.*, p. 108.
- 7) 1939年の10月17日の *New York Post* に載ったインタビューでは、Montgomery Ward Snopes のポルノ写真の商売のことを語っている (James B. Meriwether and Michael Millgate, eds., *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962* [New York: Random House, 1968], p. 40)。1939年10月頃は *The Hamlet* の創作の最終段階 (*Letters*, p. 115. cf. *Biography*, p. 1033) だが、この時点で作者は、次作 *The Town* で使うエピソードを少し考えていたらしい。
- 8) William Faulkner, *Sartoris* (New York: Random House, 1956), p. 172.
- 9) *Biography*, p. 1586. *The Town* の物語の末尾に、“November 1955—September 1956” と年月が明記されているので、恐らく作者は、1955年11月末に執筆を開始したのであろう。
- 10) このことを述べた手紙の中で6篇を書き上げたと言っているから、それらは *Go Down, Moses* に組み込まれたもの (注11) であろう。これ以後の短篇については、Hans H. Skei, *William Faulkner: The Short Story Career* (University of Oslo, 1981), p. 100 によると、1942年の1—7月の間に7篇の短篇が書かれている。それらは、“Knight's Gambit”, “Two Soldiers” (*Saturday Evening Post*, CCXIV [28 March 1942]), “Snow”, “My Grandmother Millard and General Bedford Forrest

and the Battle of Harrykin Creek” (*Story*, XXII [March-April 1943]), “Shall Not Perish” (*Story*, XXIII [July-August 1943]), “A Courtship” (*Sewanee Review*, LVI [Autumn 1948]), “Shingles for the Lord” (*Saturday Evening Post*, CCXV [13 February 1943]) である。Skei は、“The few stories that were written later than 1942 are largely by-products of his novels, with the exception of two or three texts.” (*Ibid.*, p. 110) と述べている。

- 11) これらの短篇は、“A Point of Law” (*Collier's*, CV [June 22, 1940]), “The Old People” (*Harper's*, CLXXX [September 1940]), “Pantaloons in Black” (*Harper's* CLXXXI [October 1940]), “Gold Is Not Always” (*Atlantic*, CLXVI [November 1940]), “Go Down, Moses” (*Collier's*, CVII [January 25, 1941]), “Delta Autumn” (*Story*, XX [May-June 1942]) である。この6篇は、1938年8月から1940年12月の間に書かれている (*Biography*, pp. 1024-1064)。このほかに長篇小説の一部として使われた短篇は、“Lion” (*Harper's*, CLXXII [December 1935]) と “The Bear” (*Saturday Evening Post* [9 May 1942]) である。後者は、脱稿していたが出版されていなかった長篇から取り、修正して短篇として売られたものである (Skei, p. 88)。
- 12) これらは、“Smoke” (*Harper's* CLXIV [April 1932]), “Monk” (*Scribner's*, CI [May 1937]), “Hand Upon the Waters” (*Saturday Evening Post*, CCXII [4 November 1939]), “Tomorrow” (*Saturday Evening Post*, CCXIII [23 November 1940]), “An Error in Chemistry” (*Ellery Queen's Mystery Magazine*, VII [June 1946]) である。最後の短篇は、1940年11月に Harold Ober の手に渡っていた (*Biography*, p. 1062)。
- 13) これらの歴史的事実の確認には、Samuel Eliot Morrison, Henry Steele Commager, and William E. Leuchtenburg, *A Concise History of the American Republic* (New York: Oxford University Press, 1977), p. 696、および、亀井俊介・平野孝編『総合アメリカ年表——文化・政治・経済』〔講座 アメリカの文化・別巻1〕(南雲堂、1971)、pp. 143-145 を参照した。
- 14) “On Fear: The South in Labor” (*Harper's*, CCXII [June 1956]), “A Letter to the North” (*Life*, March 5, 1956), “If I Were a Negro” (*Ebony*, September 1956) の三篇の文章で、これらは James B. Meriwether, ed., *Essays, Speeches & Public Letters by William Faulkner* (New York: Random House, 1965) に改題されて収められている。
- 15) *Intruder in the Dust* は何を基に書き始められたかと問われて、作者は当時流行していた探偵小説に触発された旨の答えをしている (*Faulkner in the University*, pp. 141-142)。Reguiem for a Nun の場合は、すでに1933年12月には同名の短篇を書いていたので、これを基にして発展させていくことは、作者にとって比較的容易であったはずだし、しかも Joan Williams との合作を試みるということで、楽しい作業でもあったのではなからうか (*Letters*, pp. 298, 300. cf. *Faulkner in the University*, p. 96)。

- 16) cf. *Biography*, p. 1224 および *Letters*, p. 248.
- 17) 1956年10月に *The Town* の草稿が印刷に回されてから、この年の12月中旬には、作者はすでに *The Mansion* の執筆を始めている (*Biography*, p. 1619. *Letters*, p. 407).
- 18) Brooks, p. 193.
- 19) *Faulkner in the University*, pp. 139-140.
- 20) *Ibid.*, p. 107.
- 21) Edwin Muir, *The Structure of the Novel*, new ed. (London: The Hogarth Press, 1957), p. 106.
- 22) *Ibid.*, p. 104.
- 23) 短篇 “The Waifs” (*Saturday Evening Post*, CCXXIX [4 May 1957]) は、*The Town* のゲラ刷りの段階で抜き取られて雑誌に発表されたもの。
- 24) この年数は、作者自身がヴァージニア大学で述べたもの (*Faulkner in the University*, p. 141)。Edmund L. Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (London: Thames and Hudson, 1964), pp. 401-403 におけるスノーブス三部作の “Chronology of significant events” でも、Flem がジェファソン にやって来たのは、1909年とされている。1927年は、Flem がサートリス銀行の頭取になり、Eula が自殺し、娘 Linda がニュー・ヨークへ発つ年である。
- 25) William Faulkner, *The Town* (New York: Random House, 1957), p. 29. 以下、本稿におけるこの作品からの引用は全てこの版により、そのページ数をカッコ内に示す。
- 26) Millgate, p. 237.
- 27) Brooks, p. 217.
- 28) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation*, revised ed. (Louisiana State Univ. Press, 1964), p. 185.
- 29) 作者は、Flem に対する感情の変化があったのか、つまり、Flem に対して同情を持つようになったのかと問われて、“an ambition or demon as base as simple vanity and rapacity and greed” に駆られる Flem のような人物に同情を示したことは決してない、と答えている (*Faulkner in the University*, p. 120)。
- 30) *Ibid.*, p. 201. これを述べている中で、“There's one more volume [*The Mansion*] which I hope will be the last but I haven't no assurance that it will be.” とまで言っている。この言葉はもちろん幾分の誇張はあったにせよ、“Appendix: The Compsons” あるいは Temple Drake の例に見られるように、人間が生きている (alive) 証明として、時間の流れの中で新たな相貌を見せることへの、作者の弛まぬ関心を示してくれていると思われる。

On the Composition and the Structure of *The Town*

Hisao TANAKA

Faulkner began to write *The Town*, a sequence to *The Hamlet*, in November 1955, though he had already made a brief outline of the Snopes trilogy as early as December 1938. The aim of this paper is, first, to survey what work he was occupied with in the period between 1940 and 1955 to seek reasons for his delay in starting the composition of *The Town*; and, next, to study a few problems in its structure, paying attention to the work's nature as a "chronicle."

Soon after the completion of *The Hamlet*, Faulkner decided to alleviate

his constant monetary difficulties by writing short stories, and then going to Hollywood. An idea he got there—the idea that “Christ (some movement in mankind which wished to stop war forever) reappeared and was crucified again”—expanded into *A Fable* (1954). The composition of this fable seems in the main to have kept the author from turning to the creation of *The Town*. In addition, as he started writing *The Town*, he was not in good condition, either physical or mental, because of sickness, habitual drinking, and irritation at the issue of racial integration.

The major problem in the structure of this work stems from the role of Gavin Stevens. Faulkner intended him to become a successor to Ratliff as the critical antagonist to Snopesism, but he turns out to be an idealist, a man of principle: instead of making realistic efforts to “save Jefferson from Snopeses,” he tries to protect Eula and Linda from Flem as the foremost embodiment of Snopesism. As a result, the story of his relationship with both women controls a large part of the whole narration, which necessarily keeps the original, central subject of Snopesism in the background.

In this connection, we may detect the tendency of the story to become fragmentary. This tendency is due not only to the regression of the original subject, but to the use of twenty-four chapters, inappropriate to the book's nature as a “chronicle.” Further, the multiple narration tends to be explanative and analytic, especially in Steven's case. The tendency, in effect, incurs the change of “the inscrutable Flem of Frenchman's Bend into the hypocritical Flem of *The Town*,” a change which diminishes the menace of rapacious, inhuman Snopesism.